

### 1 自己評価及び外部評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1090500255		
法人名	社会福祉法人 社の舎		
事業所名	共生ホームあかり		
所在地	太田市東長岡町1829-1		
自己評価作成日	令和5年1月25日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人群馬社会福祉評価機構		
所在地	群馬県前橋市新前橋町13-12		
訪問調査日	令和5年2月15日		

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

認知症高齢者と知的障害者が同じ屋根の下で生活を共にするグループホームです。共用型デイサービスを開始して5年が経過しました。コロナ禍以前は、ホーム内外の行事を共に行っていましたが、現時点では感染対策を行いながら可能な範囲での交流になっています。高齢の入居者と地域の高齢者が日中一緒に過ごす事でお互いの刺激になっています。食事やおやつ作り、季節を感じられる製作物など入居者やデイ利用者と職員が一緒に行っています。各々の力が役割分担となって生活しています。

#### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

理念にある「利用者の尊厳を大切に」をもとに日常的に利用者の意向を把握し、一人ひとりを理解しようと努めている。入居をしても、生活習慣や好きな事、自宅で行っていた家事が継続できるようにしている。あわせて、身体を動かすレクリエーションを提供している。また、家族から希望があったときに安心して面会ができるように工夫をし、理念の「家族との絆を深める」を実践している。利用者の担当制を取り入れて、夜勤者は日誌を振り返りながらケアプランの実践状況を記録するなど、職員全体でケアプランの実践に関わっている。コロナ禍のため利用者は外出の制限があるが、食事だけでも楽しめるように手作りおやつや好物が食べられるようにしたり、落ち着いて過ごせるように生活環境を整えたりして、個々の利用者の意向に沿ったケアを行っている。

#### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)		1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所の理念を玄関に掲示。わかりやすく見て頂けるように漢字5字で表記。入職時や年度始めには確認している。	「明尊交研絆」の5字で理念を表し、明るい笑顔、利用者の尊厳、地域との交流、自己研鑽、家族との絆を掲げている。事業所設立後に職員間で話し合い作成し、毎月の全体会議で理念を確認している。障害者と認知症高齢者の家族が、共に生活を続けられることを願い、共生ホームを設立した。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	開所時から地域の隣組に入り回覧板を時々に利用者と届けている。以前は地域の行事に参加していたが、コロナ禍で行事もなく、廃品回収には協力できている。近隣を入居者と散歩する際は挨拶を心がけている。	コロナ禍において積極的な関わりを控えているが、廃品回収などの地域行事に協力したり、散歩の途中で挨拶を交わしたり、顔見知りの関係を保っている。門前に掲示板を設置して、事業所の活動報告や認知症相談窓口の案内を行っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	掲示板に認知症相談窓口ステッカーと介護相談の案内を発信し、また事業所での様子がわかるように行事だよりを掲示している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	保険者から会議開催中止期間が延長され、今年度も開催できていない。地域の関係者には再開時に向け連絡している	コロナ禍となり、2年間は会議を開催していない。市からの中止指示、及び再開時の連絡についてを、会議メンバーに伝えている。	運営推進会議に代わり、事業所ができる方法で、会議メンバーの協力体制が継続されることを期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	随時送られてくる市役所担当課からのメールを都度確認し、不明な点は担当者に問い合わせをし確認している。毎月5日までに空床と待機者数を報告している。	市からの連絡やアンケートに対応している。利用者を同伴して、マイナンバーカードの取得手続きに向いている。認知症状のある住民の相談を受け、引き続きの相談が必要と考え、地域包括支援センターに繋げている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中玄関は施錠せず門は開放している。南側居室の窓はウッドデッキへの出入りが自由である	夜間帯の利用者の動きを把握するために、利用者のストレスにならないように徘徊センサーマットを使用せず、上履きや毛布に鈴をつけ、その音を聞いて対応することになっている。利用者の行動にはそれぞれの思いや理由があることを理解して、ケアしている。3ヶ月毎に、身体拘束廃止委員会を開催し、言葉による拘束も学習している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	毎月の全体会議やカンファレンスで虐待の有無や確認を行っている。常に身体観察をし情報共有している。全体会議では虐待防止についての研修をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日常生活自立支援事業の利用者は現在1名。毎月社協支援員が来所し施設利用料と小遣いを本人に確認し届けている。お金の受け渡しは職員が立ち会っている。個々の必要性については、家族や関係者と相談し検討する。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	管理者が書類の説明を行う。分からない事や疑問に思う事はいつでも連絡を受け、対応している		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナ禍でなかなか外出する機会がない中でも遠方から家族の面会を希望される際は、感染対策を行い適正な距離を保ち庭やデッキを使い面会の機会をつくっている。入居者の家族も高齢になり会える機会が限られ、望まれたため対応している	家族の来訪時や電話等で意見を聴取し、コロナ禍であっても面会ができるよう対応している。利用者の「食べたいもの」の希望を受けて、寿司を購入して提供したり、音楽好きな利用者にはCDの購入を支援したり、散歩の習慣がある利用者には散歩の見守りを行ったりしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年度末の自己申告書に記載したり、月に一度の全体会議や高齢カンファレンスで各係や行事担当から要望や提案等を出したり、利用者や家族からの意向等を報告している。	毎月のカンファレンスや日々の申し送りで、意見を聴取している。管理者に直接話したり、書面やメール等で伝えたり、話しやすい関係ができています。業務管理・評価シートや職務評価シート、自己申告書などを職員は記入し、自己の業務を振り返るなかで、衛生保持の業務を夜間帯も含めた1日を通じて意識するよう取り組んだ事例もある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	毎年年末から年明けに職員個々に自己申告書を理事長へ、業務評価、管理シートを記載し施設長に提出している。翌年度の人事考課の参考になっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	個々に希望する研修への参加を法人本部が推奨している。クラスター対策の法人内研修があり参加している。外部対面研修を申請したが、研修場所の都合でZoom研修に切り替わっている。管理者研修もZoomにて参加している		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者研修をZoomにて参加。対面研修が難しく、Webによる動画配信での研修会（リハビリや栄養担当）に申込みをし参加している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人や家族、関わってきた方等(医療機関やケアマネ)からの情報をもらい総合的に課題分析を行う。できるだけ話を聞く機会を得る。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	困りごとや不安、要望等を提示してもらいひとつ一つ説明していく。分からない事や納得できないことがあれば、出来る方法を提示していく。関わりが今後も続く事の理解と協力を得ていく。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族の必要とする支援が何であるか、面談する事で確認し、順位をつけたり、今後の見通しを踏まえたりしている。他に考えられるサービスの提案をする。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ご本人が出来そうな事を日々の役割として担ってもらえるように、職員と一緒に活動している。席の配置も配慮している		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居間もない方の場合は、家族の関わりをできるだけお願いし、身の回りの不安を少なくできるようにしている。面会できない時は、電話で状況を伝えたり、問い合わせに答えたりしている		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居前に交流していた方が面会に来ることがある。感染症対策をしながら、可能な範囲で(距離を取り)対話できるようにしている	入居前に住んでいた場所や親しんだ行事などをテレビ放映で見たときには、話題を展開して、共に懐かしむ場面づくりをしている。上毛かるたをモデルにジャンボかるたを作成して皆で楽しんだり、雑誌の定期購読や、趣味の水彩画や編み物などの継続を支援したりしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食堂の席はある程度固定しているが、その日の精神状態や体調により、配置を変えたり、活動内容によっては、移動したりしている。言葉が少なくても、隣に座る人によっては、笑顔になったりふれあっている事もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	電話でその後の様子を聞くようにしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の会話から要望を聞いている。困難な方には、家族に聞いたり、日頃の様子から表情や態度を汲み取り、出来るだけ近づけるようにしている。	昼食前の30分間を、利用者の意向をうかがう機会としている。発する言葉から気持ちを汲み取るよう努め、その人の過ごしやすい環境をつくれるよう、人や物、衣類、配置などの環境調整に努めている。環境が整うことで気持ちが安定し、不穏状態が解消できた事例もある。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の担当者からの情報を頂き、家族の意向も踏まえ、自宅での生活に近い環境で過ごせるように自宅で使用していた物を設置し、安心に繋げている		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日中活動で参加される様子や食事、入浴等での状態を確認し、出来ている事を維持し、できそうな事へ繋げるようにしている。掃除機かけを午前中の日課にして下さる方がいる		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者には適時意向を聞いている。家族には面会や来所時、電話等で確認している。定期往診時に医師からは医療面での助言を得て、訪問看護師からは生活上での留意点を聞き、ケアに取り入れている。毎月定期カンファレンスで情報共有を行い作成している	入居当初は、計画作成担当者が仮のケアプランを作成し、職員が観察して意見を出し合って本プランを作成している。プランに沿った支援の実践状況を週1回チェックし、担当職員が3ヶ月毎にモニタリングし、管理者がプランを評価している。状態の変化や家族の意向を聞き取り、6ヶ月毎にプランを見直している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別介護記録に都度記載し、変化がある際は連絡ノートを活用し口頭でも申し送っている。カンファレンスでは対応方法や方向性を確認し、情報共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ禍以前は、定期的に歌や製作をして下さるボランティアがきていた。当面来所できないため製作物を届けてくれた。再開時にはすぐに来ていただけるよう関係性を繋いでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居者の知人が近隣に住んでいて、誕生日や他の日にも面会に来てくれている。感染対策を行いながら、デッキ越しでの会話や可能な範囲で対話をしている。日常とは違う表情を見る事ができている		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者が在宅の頃からの主治医がそのまま往診していたり、かかりつけ医が入居者と24時間の支援を受ける契約をすることで、家族の安心に繋がっている。現時点では入居者全員が往診対応。	コロナ禍の状況から、通院することによるリスクを回避し、全員が往診医を利用している。月2回の往診、週1回の訪問看護で健康状態を管理し、緊急時にも対応している。嘔吐や発熱、意識障害などにも早期に対応し、主治医に繋がっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎週金曜に訪問看護師が来所しバイタルチェックをし、その際に医療相談をしている。状態変化や対応方法など助言や指導を受け、受診や往診に繋いでいる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院した場合は、速やかに担当者と連絡を取り、情報共有し、経過を見てさらに情報を得る。退院調整では、受け入れ態勢を整え家族の意向も聞き、出来るだけ早期になるよう対応している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時にまず、重度化した際の対応を説明している。医療的ケアが必要な場合は、状態に応じて主治医や訪問看護師等と家族も含め、方向性を検討していく。ホームでは医療的ケアができないため望まれる終末期について方針を示していく。	看取りを行っていないことを入居時に説明し、体調不良時の対応として、主治医の判断に委ねるのか、救急搬送を希望するのかの意向を確認している。「施設が利用者に行える事は」を今年度の課題として、今後の終末期の対応の在り方を検討している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	全体会議や高齢カンファレンスで日頃から急変時の対応について情報共有やシミュレーションしている。不審者対応や吐物処理方法なども実践している。また連絡先の確認も行う。他事業所のコロナ陽性者対応について話を聞く機会を持った。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回以上避難訓練を実施。近隣宅には事前に訪問し説明をしている。訓練内容は全体会議で職員に周知。入居者や新人職員が参加し経験している。	障害者施設と合同で、避難訓練を行っている。災害・防災担当の職員が中心となって計画し、夜間と昼間の想定で実施している。万一の際には同法人の作業所を避難所とし、備蓄品を蓄えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	名前に「さん」をつけて呼んでいる。排泄時や入浴時などバスタオル等を活用し肌の露出を少なくするようにしている。	呼称は、親しみを込めて下の名前に「さん」付けとされている。一人ひとりのこれまでの人生を尊重して、理念に立ち返っての支援を心掛けている。入浴時に希望があれば同性介護で対応し、排泄介助においては、些細な言葉で利用者を傷つけることのないように細心の注意を払っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	個々の認知症状や理解度に合わせて、職員がわかりやすく選びやすいように準備をして、決めてもらったり、家族に聞いたりして望まれる生活に近づけるようにしている		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	散歩を希望されれば、自立の方は、建物外周をご自分で決めて歩かれたり、近隣を歩きたい時は一緒に出掛けている。レクリエーションで削り絵を希望された方がいて、応じて支援している		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	洗顔後に化粧水を使われ、眉を描かれる方がいる。鏡の前に立ち、ご自分で整髪できるようにブラシをわかるところに置くようにし、声かけや見守りをしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者が食材の皮をむいたり、切ったりして頂いている。同じ方に偏らないように分担している。おかずを人数分に取り分けもして頂いている。食べたいものがあれば可能な範囲でメニューに取り入れている。洗い物をして下さる方もいる。	1週間分の献立を立てて、材料を発注している。職員が交代で調理し、栄養バランスを考慮した食事を提供している。利用者の誕生日の朝食には赤飯を、3時のおやつには皆でケーキ作りを行っている。月の行事や室内行事に合わせてホットケーキやクレープなどを手作りし、好みや食欲に応じて代替品も提供している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の記録に水分量を都度記載し、水分摂取の少ない場合は好みの飲み物を提供。氷水が好きな方は水筒を常時する。食事形態を確認し食べやすさを配慮しメニューによっては形状を変えている。(細かくしたり、小鉢に移したり、食べられるようにスプーンを使用したりしている。)		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後個々に声掛けをし洗面所に案内している。うがいをし頂き、自歯の方はブラッシングをご本人が行い、状態に応じて介助を行う。義歯の方は外してもらい、義歯の洗浄とうがいの声掛けや介助を行う。口腔内の汚染があれば口腔スポンジを使用し拭き取り介助を行っている。毎晩義歯洗浄剤にて消毒。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄状況を記録し次の排泄時間を想定しトイレへの声掛けをしている。出来るだけ便座位をして頂いている。本人の排泄意も都度確認し、訴え時は速やかに案内をしている。夜間帯でも自立で歩行できる場合は声掛けと見守りを行いトイレでの排泄を支援している。	排泄時は便座に座ることを基本とし、日中は全員がトイレで排泄できるように支援している。一人ひとりの様子を観察し記録して、それを基にそれぞれの排泄パターンを見出している。「トイレで排泄する」という意思を尊重し、本人の体調や動きに合わせて便座に誘導し、見守りと介助を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	お通じをよくするために起床後の朝食前に牛乳を飲んで頂いたり、水分補給時にオリゴ糖や乳酸菌飲料を取り入れたりしている。トイレ誘導時に廊下を歩くようにして活動を増やしている人もいる。出来るだけトイレでの便座位をして頂いている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴日の固定はせず、体調や気分の良い日に入浴している。入りたくない日は無理強いをせずに翌日等に振り替えている。衛生面に配慮し、汚染時等も柔軟に対応するようにしている。乾燥する季節には、保湿クリームを塗付している。	週2回の入浴を原則とし、気分が乗らない時は別の日に実施している。脱衣室の温度を上げる、大きなタオルで全身を包むなど、その人が抵抗なく入浴できる方法を職員が共有して対応している。1日に3~4人がゆっくりと、会話を楽しみながらリラックスして入浴できるようにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入浴後や食後などに横になりたい方は居室や共用ベッドで休まれている。居室の布団やリネンは定期的に干したり洗濯したり、布団乾燥機を使っている。安眠を促すために室温や湿度にも留意している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者自身が薬の内容を理解するのは難しいが内服一覧表を作成し、出勤時に見て確認するようにしている。変更時は申し送りノートに記載したことを確認し観察を行うようにしている。口頭での申し送りも行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物干しやたたみもの、食事やおやつ作り、お茶入れなど、日々固定せずにできる人をお願いしている。定時に掃除機かけをして下さる方がいて感謝の意を伝えている。じゃが芋や玉ねぎに皮むきなど、出来るような事はして頂いている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍以前は、適時買い物や季節に応じた外出、レク等ができていた。現状は、感染者の少ない時期に職員と近隣を散歩したり、近場をドライブし、季節を感じられる程度であった。	季節の良い時期には、ウッドデッキでお茶を飲んだり、お菓子を食べたりして過ごしている。新録や花見の季節には、数人づつ交代で散歩やドライブに出掛けている。職員が事業所の業務として買い物やゴミ出しに行くときは、利用者も車に同乗して、外気を楽しむ機会を作っている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	日常生活自立支援事業を利用している方が1名。毎月施設利用料を届けてもらう際に、小遣いも本人に確認し依頼している。本人が購入したい物があれば、広告等でわかる物は、職員が購入して渡している。通販でCDを購入する際は、電話等で職員が代行している。(コロナ禍で外出できないため)		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話の希望があれば、応じている。ダイヤルを職員が押し、電話口に本人が出ている。年賀状が届き本人に渡すと喜ばれている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	集団で過ごす食堂は、季節を感じられる製作物を掲示している。浴室やトイレは衛生面を配慮し、介助ごとに消毒を徹底している。廊下や食堂には加湿器や空間除菌脱臭機を設置。トイレには冬場センサーのファンヒーターを置き温度差を軽減している。	木造建築で落ち着き、南向きで陽当たりも良く、ホールのソファで昼寝をする利用者もいる。室温や換気に配慮し、レクリエーションで作成した作品が展示されて、穏やかに過ごせるようにしている。広い庭には、季節の花や紅葉をみることができ、気分転換が図れている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂の自席だけでなく、ソファを使って対話したり、ゆったり過ごされる事がある。デイサービスの利用者が入居者の部屋で対話をされる事もある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使用していた布団や毛布を持参しそのまま使用して頂いたり、歌の好きな方は、テレビやポータブルプレイヤーを使って、好みの歌や童謡など歌われている。	居室の間違いを防げるよう、名前の他に花や鈴などを入り口に飾って、本人が分かるように工夫している。家具や電気製品、寝具などは、使い慣れた物を持参している。プレイヤーとディスクを持参して自室で歌を唄ったり、CDでクラシックを聴いたり、洋画を観たりと、自室で自分の世界を楽しめるよう支援している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレや風呂場、居室に目印をつけ、ご自分で移動できるようにしている。居室内に洗濯物を干せる方は、ピンチの高さを調整している。		